



台湾ランニング事情 第10回 2018年第9回高雄 MIZUNO 国際マラソン

石原忠浩（台湾・政治大学日本研究プログラム 助理教授）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

毎年旧暦1月15日の元宵節（小正月）前後に高雄市内で開催される「ランナーにとって台湾でも友好的な都市マラソン」と称される高雄 MIZUNO 国際マラソンに参加した。

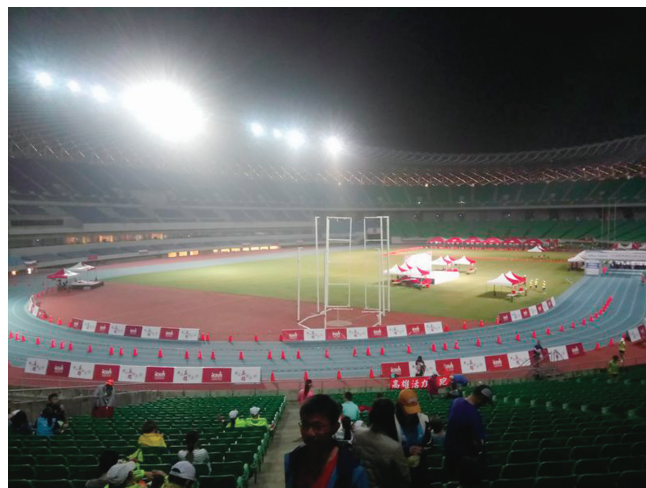
一、はじめに

台湾での都市型マラソンで最大規模のレースは、北部では毎年12月開催の台北マラソンが挙げられるが、南部では、ここ数年、スポーツメーカーの MIZUNO が冠スポンサーとなり、高雄市政府が主催者となっている高雄国際マラソンが唯一のものでなかろうか。

亜熱帯の台湾で、フルマラソンに適した季節は、最高気温が20度を下回ることが「期待される」12月から3月ではないかと思う。筆者の毎年のフルマラソンの概ねのスケジュールは、12月中旬開催の台北マラソンから3月中旬までの間に台北・新北界隈で2レース、高雄か金門で1レースを走るのが定番になっている。そうした位置づけにおいて、旧正月明けに開催される高雄国際マラソンは、必ず選択肢に入っており、今年で3回目の出場となった。

3度も南部へ遠征させる気にさせる高雄マラソンの魅力は何か？1つ目に、高雄市の目抜き通りを走れることに尽きる。台湾最大の台北マラソンは、101ビル横の台北市政府が発着点であり、2016年のレースから、中正記念堂や総統府脇を走るコースに若干「改善」されたとはいえ、未だにコースの半分近くが、車両規制の容易な河原のジョギングコースを走ることになる。一方、高雄マラソンはほとんどが、市街地を走るコースである。2つ目に、ゴールの競技場である。ゴールの

高雄国家体育场（National Stadium）は、最大5万5千人の収容能力を擁し、2009年にワールドゲームズの開会式、閉幕式が行われた、台湾でも有数の国際レベルの競技場である。同競技場を管理する高雄市体育処によると同競技場は、国際陸連（IAAF）から最高レベルのクラス1を認定されているほか、国際サッカー連盟（FIFA）の要求を満たすサッカー競技場となっており、2018ロシア・ワールドカップのアジア地区二次予選の中華台北チームのホームゲームが開催されている。日本国内のマラソン大会に出場経験の無い者にとって、国際レベルの「スタジアム」と呼べる競技場でゴールする気持ちは、格別のものであり、その「感動をもう一度」という気にさせるものがある。3つ目に、高雄市民の「熱情」を挙げたい。「北部の人間は冷たいが、南部の人間は情に厚い」とは、台湾



出発前の国家体育スタジアムの様子

でしばしば見聞する言説である。台北マラソンの沿道の応援は、早朝に目抜き通りを走り抜けるせいもあり、至って静かである（ゴール前1Kの101ビル界隈は、かなりの人出で、賑やかです）。高雄では、都市マラソンでありながら地方都市のレースで散見される地域の小学生らの吹奏楽の演奏、寺廟のある地域では打楽器を打ち鳴らす賑やかな応援のほか、賞味する余裕はいつもないが、小腹を満たせるような充実した私設エイドも多く、沿道では「加油」の声援が途切れる事もない。

こういった魅力が、「もう高雄はいいだろう」と完走後には思いつつも、初冬の頃には、エントリーをしている自分がいるのである。

二、大会概要とエントリー

概要

第九回 MIZUNO 高雄国際マラソンの概要を表1に記した。レースは42K、25K、5Kで定員はそれぞれ、6千人、8千人、1万2千人の総計2万6千人で台北マラソン（27000人）、スタンダード・チャータードマラソン（29000人）に匹敵する規模である。

2016年以前のレースでは、スポーツ振興、家族連れの参加への期待と規模の拡大を通じて大会を盛り上げようとしたのかは定かではないが、最短距離部門は短めの3.5Kで出場料も無料にし、定員も最大2万人まで拡大した時代もあった。しかし、昨年以降は距離も5Kに伸ばし、有料化している。だが、200円で記念Tシャツとハンカチ、飲料水が付くのは、台湾人こだわりのCP値の高

いレースであるのは間違い無いであろう。台湾におけるスポーツ情報の人気ウェブサイトであり、筆者も無料写真のダウンロードでお世話になっている運動筆記（スポーツノート）によると、高雄国際マラソンに対する参加者による5点満点の評点でこの4年間で4.0～4.4を獲得しており、台北マラソン2.9～3.7、スタンダード・チャータード3.2～3.9、萬金石マラソン3.4～4.4と比べても高くなっている。

賞金レース

市民ランナーには無縁とはいえ、台湾で重視されるのがレースの賞金である。台湾の一定規模のロードレース大会には、賞金目的の「ケニア軍団」の出現が定番となっている。本レースでも42K、25Kの上位入賞者には賞金が支給される。金額は表2に示したが、42Kの優勝者には30万元、10位にも1万元が支給される。（25Kは優勝3万元～10位2千元）一方で、台湾らしい？のは、台湾人選手を鼓舞するために、台湾人の上位3名までは、別途1位6万元、2位4万元、3位2万元の特別報奨金が設けられている。

今年のエントリー

人気のはずの高雄マラソンに今年は、「異変」が生じたようである。直前の報道では、今年のエントリーは、全てのカテゴリーで定員の上限に達しなかった。その原因は、台湾におけるマラソン人気の退潮（確かにその兆しはあるが）というよりも、ここ数年、台湾で政治社会問題化している大

表1 高雄国際マラソンの概要及び参加費用

種 目	42 キロ	25 キロ	5 キロ
参加費用	1100 元	900 元	200 元
制限時間	6 時間 10 分	3 時間 40 分	90 分
定 員	6000 人	8000 人	12000 人
エントリー数	5542 人	7582 人	不明
完走数	4299 人	5769 人	—
スタート時間	6 時 20 分	6 時 40 分	7 時

表2 高雄国際マラソン上位入賞獲得賞金一覧

1位	30万台湾元	6位	5万台湾元
2位	15万台湾元	7位	4万台湾元
3位	10万台湾元	8位	3万台湾元
4位	7万台湾元	9位	2万台湾元
5位	6万台湾元	10位	1万台湾元

気汚染に求められよう。

5年ほど前までの台湾における大気汚染の原因は、対岸の中国に求められるものが多かった。しかし、最近ではその原因は、台湾における重化学工業を中心とした工場施設からの排煙、整備不良の車両の排ガスなどが指摘され、特に中南部ではとりわけ深刻な状況が報告され、環境団体などによる「新鮮な空気を返せ」等の主張を展開するデモ活動も起きている。2017年のレース前にも、当時深刻な状況が伝えられていた台南、高雄などでは「PM2.5の数値が一定基準を上回った場合は、マラソン大会等野外の活動は中止すべき」という意見も出るほどであった。当地の報道や関係者の話では、大気汚染を憂慮してエントリー数が減ったと指摘する報道が散見された。中国のように重要な国際イベント開催時に、公権力で企業に操業

を停止させる権限を台湾当局が持ち合わせていないのは、民主社会では致し方の無いことである。

全体的な応募者減とはいえ、今大会には、33の国地域から外国籍ランナー692名がエントリーし、前年度比で約二倍の成長をするなど「国際マラソン」に恥じない陣容になってきたのを示した。また「国際マラソン」の名に恥じないように、大会パンフレットはカラーで中国語、英語、日本語の三ヶ国語の「豪華版」である。

三、コース紹介

コースは、図1に示した。簡潔に説明すると台湾高铁の左営駅の北に位置する国家スタジアムを出発後すぐに南下し、目抜き通りの博愛路、中山路を走る。日本人観光客にも馴染みの深い、高雄駅、美麗島駅、中央公園を通過し10キロ過ぎに西に曲がり青年路に入り、愛河沿いを北上する。24キロ過ぎにゴールとなるスタジアムをかすめ、更に北上し、32K過ぎの漁港のある地域を往復する形でスタート地点に戻ってくるコースである。

市街地を走るコースであり、高架橋を超える箇所はあるものの概ね平坦なコースである。

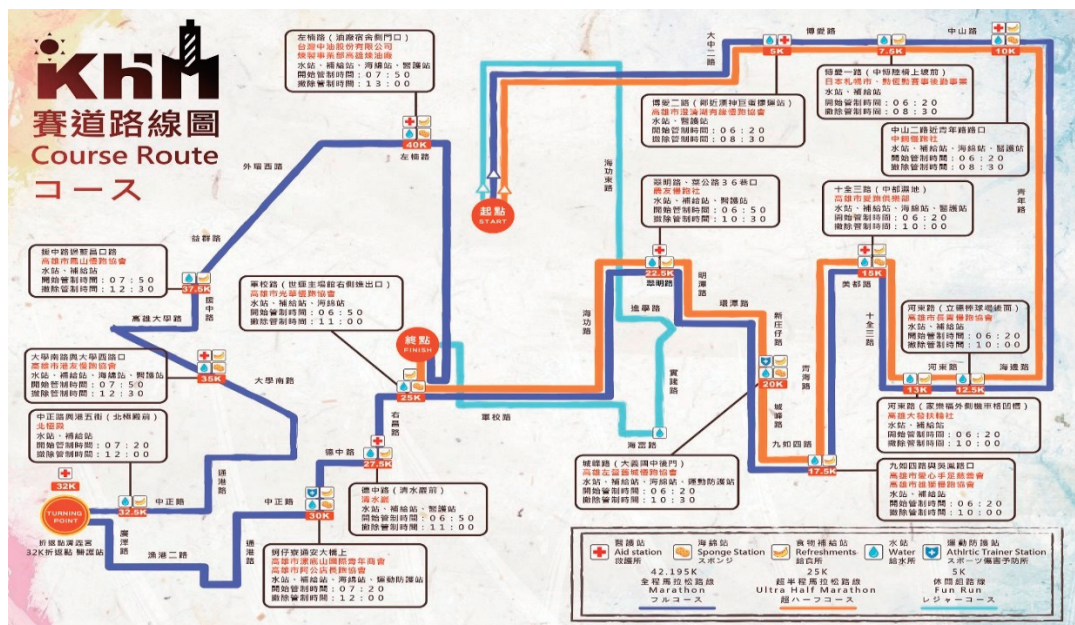


図1 高雄国際マラソンコース (青色が42Kのコース)

四、レースの様子と結果

上位選手の結果

先にエリート部門の紹介を。男子部門は2016年大会でも優勝しているケニア人の Charles Kigen Kimutai が2時間17分台で二度目の優勝を飾ったほか、ケニア集団が1-5位、7位と上位を独占した。6位には友好都市の栃木県小山市から参加していた沢登豊氏が入賞し、「ケニア勢の上位独占を阻止」と報じられた。女子は中国籍の何引麗が2時間42分台で優勝、2位にはウガンダ籍の Chemutai Immaculate が入り、日本勢では、サロマ湖ウルトラマラソンの優勝経験者の藤沢舞女史が4位に入賞したと報じられた。

注目の台湾勢は男子が、2017台北ユニバーシアード代表の選手が8位に入賞し、女子も「素人ランナー」が6位に入賞するなど健闘したと報じられた。

当日の準備

レース当日は、6時20分のスタート時刻から逆算し、1時間前の現地到着を目安に準備をする。普段は6時前後から運行する高雄市地下鉄だが、レース当日はランナーへのサービスとして、特別ダイヤを施行し4時半から5-8分間隔で運行し、これら臨時ダイヤの情報も豪華パンフに記載されていた。

日本のマラソン本では、スタートから「4時間前起床」が定番のようだが、早朝スタートの台湾で筆者は実行したことがない。今回はスタート2時間半前の3時50分に起床し、軽い食事やテピングをすませ宿を出る。美麗島駅で5時発の地下鉄に乗車し、会場最寄りの世運駅には5時15分に到着。まだ真っ暗な中、徒歩10分で5時半前に競技場へ到着した。

昨年は荷物を預ける際の大渋滞で、慌ただしくスタート地点への移動を余儀なくされたが、今年

はゼッケン番号にかかわらず、どこのエリアでも荷物を預けることができたこともあり渋滞は皆無であった。荷物預け時に預けた場所のテント番号と荷物番号が印刷されたシールを荷物とゼッケンに貼るので係員も迷うことがない。この辺にも運営側の改善が感じられ嬉しくなる。

「国際マラソン」を強調するだけあり、開会式を取り仕切る司会者が参加者に対して「ゼッケンとチップをつけ忘れないように」、「組別のスタート時間を間違えないように」などの注意事項を叫んでいたが、先に中国語で話した後、すぐに日本語で同じ内容を叫び、時々思い出したように英語での説明もしていた。英語よりも日本語が「厚遇」されていたのは、参加ランナーの多さ（報道は無かったが国籍別で日本人は1位のはず）を考慮すれば納得だが、日本人ランナーにとっては有難かったはずである。

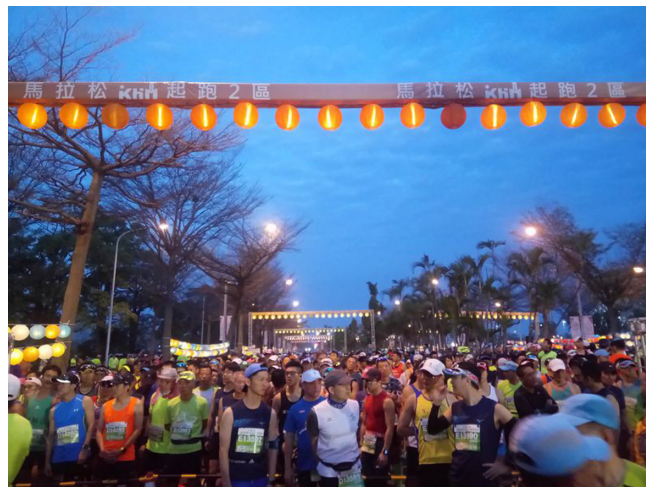


豪華パンフ、ゼッケン、記録証明書

スタート時の場所取り

スタートエリアのゾーン分けであるが、2時間15分を切るような招待枠の選手を除けば、台湾のロードレースでゾーン分けをするようになったのは、数年前からであり、レースにおける好位置の場所取りは「早いもの勝ち」が台湾の常識となっている。その点、高雄国際マラソンは、筆者が初参加した2015年時から予想ゴール時間を自己申告し、そのタイムにより、1組：3時間10分以内、2組：4時間10分以内、3組：5時間10分以内、4組：5時間10分以上に分けている。なお、エリート組は当然ながら1組の前に特等エリアが確保されている。筆者は、初参加の時は正直に？2組スタート相応の予想ゴール時間で申請したが、2015年のレースでは2組のゾーンの中に3-4組スタートのゼッケンをつけた走者が相当数乱入し、係員も全く整理規制をしていなかったことから、前回の大会からは、1組でスタートできるよう「自己過信申告」をしている。

しかし、今年のレースでは杞憂に終わった。各ゾーンの入り口でボランティアの係員が厳しく目を光らせランナーのゼッケンに目を凝らし、有無を言わず「あなたは2組、君は3組だから後ろ」などの的確な指示を出している姿に安堵？し、再度仮設トイレに立ち寄る時間が出来たのは、個人的には助かった。スタート20分前の6時過ぎには、スタート位置に整列するが、後方の2組のエリアがかなりギュウギュウに詰まっているのと比べて、1組のエリアは軽い運動をできるスペースも確保できた。そして、舞台では主催側の主である陳菊高雄市長の挨拶が始まる。日韓越など複数の自治体関係者、退任する陳菊市長の後を襲うことになる次期高雄市長選挙の出馬を目指す高雄市選出の立法委員も多数確認できた。陳市長は過去の民進党の選挙キャンペーンでは、活力十分の話術で聴衆を引き込む術に長けているのだが、当日朝の挨拶は抑揚が無く「原稿の棒読み」に終始して



スタート10分前の様子

いたのは個人的には残念であった。

レース実況

私事な話で恐縮だが、今回はレースの2週間前に、五十肩現象で右肩が上がらない状況になり、日常生活にも支障をきたし、一時はレースの棄権も考えたが、治療とリハビリにより、腕が回せるように回復したことでとりあえずレースは出るという気になった。レースの目標も、弱気になっていた頃は「完走」、少し回復してくると「サブ4(4時間)」と徐々に上方修正し、最終的には本来の目標である「サブ3.5(3時間半)」となった。しかし、前日の気象予報では、「21-29℃晴れ」の予報が出ており、35K以降の失速をあらかじめ想定しつつも、「行けるところまで」と目標を再度下方修正して挑むことになった。

スタート時の気温21℃、まだ太陽が出ておらず、ひんやりとして快適である。定刻通り6時20分に号砲。1組スタートのせい、15秒以内で計測地点を通過し、スタート時の渋滞もない。3時間30分ゴール予定の年配のペースメーカーを確認し、しばし追走するが、明らかなオーバーペースとわかり、すぐに自分のペースに戻す。最初の1キロは想定ペースの4分55秒で通過。早朝の目抜き通りを南下していく。8キロ手前では、今



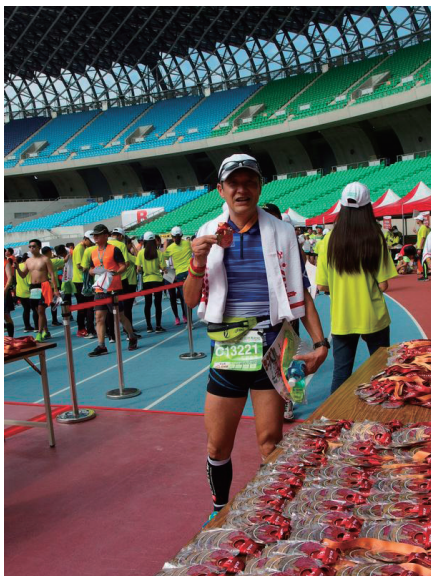
9 K 地点の筆者

レースの最高標高と思われる高雄駅を通る線路を跨ぐ陸橋を超え、更に進むと有名な六合夜市に近い美麗島駅の通過時には家族の声援も受ける。10K 通過は 49 分 4 秒と順調。コース左に愛河を眺めつつ走る運河沿いの路では、20 分遅れでスタートした 25K 組の先頭集団に抜かされるが、三人の先頭集団の中のアフリカ勢に混じって台湾人選手が 1 名食らいついており、沿道からは「台湾選手加油」などの声が我々ランナーからかかった。(同ランナーは 2 位でゴールした) 7 時半を過ぎると陽が昇ってくるが、幸いにも高層ビルが多いせいか、直射日光を受けることはない。涼しげな蓮池潭沿いの辺りで 21K を通過。サブ 3.5 を狙うには十分な 1 時間 43 分 17 秒で通過、昨年より 1 分半も早いペースである。24K を過ぎて右手にゴールのスタジアムを眺め、ラストスパートをかけている 25K のランナーを見送り、我々 42K 組は更に北上する。後勁溪(河川)を超えた 27K 地点からの 2 キロは造成地が広がり、沿道には応援の人々も疎らになり、陽射しを遮る建物も無く、疲労がでてきて最も辛く感じるエリアである。昨年は小用を足した 30K のエイド地点も今回は、給水のみで 2 時間 28 分 12 秒で通過した。



31K 地点の漁港内を力走中

9 時近くになり気温は更に上昇し 25℃ 以上になるが、依然として 3 時間半切りペースは 1 分弱上回っており、余力もあった(ように思えた)ことで、「これは記録が狙えるかも」と欲がでてきた。31K 地点の蚵仔寮漁港には、顔見知りのカメラマンがおり、しっかりカメラ目線で撮ってもらう。32K の折返し地点に位置する海の女神を祀る蚵仔寮朝天宮は、関係者が多数コースに出て飲料水やら果物を手渡しで渡してくれるほか、様々な楽器を打ち鳴らし、ローカル色豊かな雰囲気疲労も少しだけ軽減した(ように思えた)。しかし、造成地のコースに戻ると更に強くなった陽射しを受け、ペースダウンが始まる。それでも 35K の通過は 2 時間 53 分 51 秒で通過、計算上は少し挽回できれば「夢」に届くところである。だが健闘もここまで。35 キロ以降のラップは 514、522、534、545、549 と予想通りの失速となる。喉の渇きも異常で 35K、37.5K のエイドではスポーツドリンクをコップ 2-3 杯も飲むが 1 K も走らないうちに喉がカラカラになる。40K は 3 時間 21 分で通過、「せめて自己記録更新を」と思うが、両足太ももがパンパンで半ば攀っている状態になり、身体が全く言うことを聞かなくなる。それでも、無理やりにでも腕を大きく振ることで重い足を前に運ぶ動作を続け競技場に入り、知人はいなくても、最後は観衆の中、笑顔でゴールする。暑さのせい



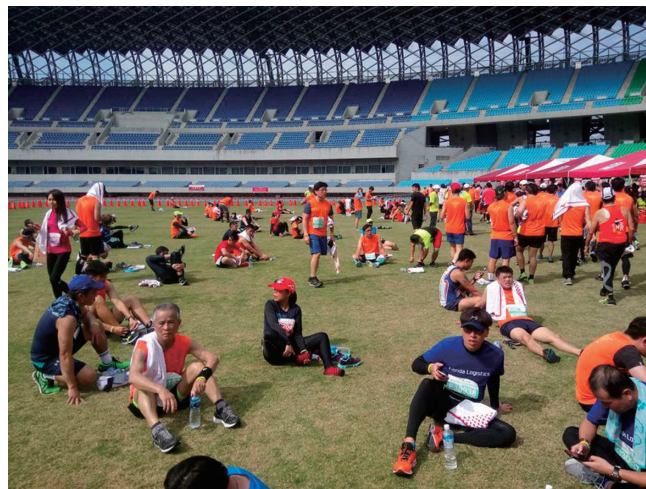
ゴール時の筆者

か、グラウンドには座り込み、大の字になっているランナーを横目に、完走メダルとバスタオルをもらい、成績を打ち出してもらおう。記録はネットタイムで3時間34分台、過去三回の同レースで最も速い記録であり、病み上がり、ゴール時27℃の暑さを考えれば上出来の結果であった。

五、レース後の雑感

高雄は台北在住の者にとってはアウェーとはいえ、観光地の花蓮や金門に比べれば交通至便、宿の選択も多いため準備段階での苦労は少ない。また当日の会場への移動も台北ではあり得ない、地下鉄での移動が可能であり、ストレスが少ない。この点、日本人ランナーが観光と絡めて参加するのも適しているレースであるように思う。

レースの運営も荷物の受け渡し、スタートエリア時のランナーの管理は年々改善されたのが実感できたし、ゴール後すぐにもらえる成績証明書は



ゴール後のランナー達

ありがたい。

コースについては、「最も友好的な都市マラソン」と言いながらも、広範な道路規制に反感、不満を持つ住民が多いのも事実であり、彼らと交通規制に汗を流す警察、ボランティアが罵り合う場面を目撃したのは例年の如くであった。その点、「どうせフルマラソンを走るなら全線規制が徹底され、ボランティアの質も高い日本の都市マラソンを走りたい」という台湾人ランナーが多いのも頷ける。この辺は駅伝などが文化として根付いている日本と比べると、台湾でのロードレースは「一部の道楽者がやるレジャー」という枠を抜け出せないままなのかもしれない。

記録狙いに相応しいかを考えると高雄国際マラソンはノーである。平坦なコースで風などもあまり感じることはないが、記録が狙えるか否かは天候頼みではないだろうか。去年は最高気温が18℃と台湾では絶好の部類にはいるコンディションであったが、筆者が参加した他の2回のレースはいずれもゴール時の気温が25度を超える暑さ

表3 高雄国際マラソン記録の変遷

レース日	ネットタイム	総合順位	年代別順位
20150308	3時間38分55秒	291位/4032	97
20170212	3時間36分59秒	411位/5918	57/982
20180225	3時間34分14秒	279位/5592	25/994

であった。実際、ケニア勢、日本勢の上位入賞も完走後には高雄の暑さに言及していた。今後は、ベストタイムで2時間10分を切るようなランナーを呼ぶには、報奨金の積み上げのほか、開催時期の選定を旧正月にこだわらず気温の最も低い1月中旬から2月中旬にずらすか、スタート時刻を30分から1時間繰り上げる必要があるように思える。

当初懸念された大気汚染に関しては、レース当日は気になるレベルには達しておらず、マスク着用で走る者は見かけなかった。しかし、南部の大気汚染が深刻というイメージはエントリーするランナーの心情に多大な影響を与えるので、さらなる改善に期待したい。

自身の記録は、今回も35Kから失速したのは

全てのマラソンランナーにとっての永遠の課題であり、筆者も二年以上克服できていない。しかしながら、負傷からの回復途上、27℃の暑さを考えれば、本レースは満足すべき内容であったのは間違いない。今回、本文を執筆するにあたり、GPSでの記録やGoogleマップを見直してみるとレースの感覚、特にレース終盤で足を攣りそうになったことや異様な喉の乾きの感覚が、鮮やかに蘇ってくる。恐らく、来年もエントリーしそうである。追記：「高雄マラソンは25Kの部が高雄の見所をほぼ網羅しています。フルはへんぴな場所を走るから私は…」という高雄生まれの知人の意見を改めて聞く機会があった。来年はフルマラソンの調整として25Kにエントリーする気になっている。